

佐賀大学理工学部 井 前 勝 人

一般に実態調査では、調査主体（誰が）、目的（何を）、調査対象（誰に）の3要素で構成されている。しかし、往々にして調査結果のみが先行し、これらの要素についてまで言及されることは少い。なかでも目的（何を）が最も重要な役割をはたしている。しかし、目的である調査項目の作成は、従来は経験を主とし羅列的かつあいまいな点が多かった。本論文はこの点に着目し、その調査項目の作成に ISM 手法を導入し、回答し易く一貫性を持たせ無駄のない効率的なアンケート票作成のためのプロセスを論じたものでユニークなものであると思う。ただ紙数の制約からと思われるが本論文だけでは具体的なイメージがつかみにくいので若干のコメントが必要である。

(1) 調査目的の明示化について

調査の目的が何であるかによって調査項目が違ってくる。本論文の場合図-1のフロー図にアンケート作成の目的、立場の明示化とあるが、そのコメントが必要である。一般に調査主体は地方公共団体や民間など目的に応じて多種多様であるが、下水道問題はその性格からみて行政サイドである公共団体が調査主体となることが多く、調査目的も下水道事業を採りあげるかどうかの判断に資するためのものと、採りあげることは既定の方針であるが、下水道計画のなかに住民の意志をどのように組みこんでゆくかの判断に資するものがある。今回の調査主体の意図がどのケースに当たるか判然としない。

(2) Brain Storming による調査項目の抽出に参加する集団の構成について

参加者の自由な発想に基づき調査項目を抽出するのであるが（この場合、100項目となっている）、参加者の構成がどのようになっているか説明されていない。参加者の構成次第で100項目の内容はかなり違ったものになり、次のプロセスである Category への集約化プロセスにも影響を与えると思われる。したがって、調査目的と密接な関係を有する Brain の構成をどう考えるかが1つのポイントと考える。

また、図-1に示されているように各プロセスの進行によって合意に達せずフィードバックする場合に何回かのくりかえしが必要であったかどうか、作業の進歩を図るための意見のまとめ役またはリーダーを構成のなかで考えたか、あるいはその必要はなかったかの説明が望まれる。

(3) 集計結果の分析について

(イ) 単純集計結果の分析について

Category（11項目）の時空間スケールでの規定により具体的なアンケート票が作成されているのであるから、特に時間スケールの面から年令層から見た分析結果の説明が欲しい。

(ロ) クロス集計結果について

し尿を肥料として使っている人は水洗化を希望しないし、下水道の必要性の意識もうすいことは興味のあることである。このことは下水道はし尿を無駄にするというイメージが強いということである。したがって、アンケート調査に当たっては、住民意識の誘導にならない範囲での下水汚泥の再利用等の情報の提供が必要と思うがどうか。